

## 「賢者」と「見者」と「文学狂人」

——クノー流ゲームの規則——

中 島 万紀子

レーモン・クノーの場合、その華麗なことは遊びや小説の数学的構想については声高に語られてきたいっぽうで、その作中人物たちに関する問題は、わりにひっそりとささやかれてきた程度で、あまり一般的とはいえない。本稿では、そうしたクノーの作中人物たち、特にいくつかの小説において中心に据えられている間の抜けた人物をとりあげることで、その向こうに見えてくる、世界に対するクノーの姿勢、そして書くことに対するクノーの姿勢に着目することが目的である。じっさい、クノーの小説のなかの人物たちを考える作業は、すっきりと合点がいくような「謎解き」とはほど遠く、たぐるほどにさまざまな問題があらわれて、「謎が謎をよぶ」ようなねじれた道すじをたどるものであった。親しみやすい外観の作中人物たちに誘われて、この20世紀のフランスの知性がついにいたった奇妙な認識の迷路におびき寄せられてしまったという感を強くしながら、ともかくも手はじめに、間の抜けた主要人物たちの姿を検討する。

## 1. 見かけによらない「賢者」たち

1942年の『わが友ピエロ』の主人公ピエロは何をやっても失敗ばかりのさえない男で、「ユニ・パーク」という遊園地の従業員となるが、なにやら不連続きで、ほかの仕事に就いたときと同じくまるで長続きしない。おまけに人からはぼんやりした人間だと思われている。また、ホルドーで小間物屋を営むオールドミスジュリアが、20も年下の復員兵を見染めて結婚するところからはじまる1952年の『人生の日曜日』でも、その復員兵ヴァランタンが、ピエロと同じく、穏やかで愛すべき人間だけれど間が抜けていて何をやっても半人前と周囲からは思われており、姉さん女房の言いなりになってばかりという姿を見せている。しかし、これらの小説は単なる間の抜けた男の滑稽劇には終わらないようである。ものに動じず、運命を甘受するようなふたりの態度はたしかに目をひく。ヴァランタンにいたっては、なにげないおしゃべりの中で唐突に歴史についての見解を披露したりする。

「マダガスカルではね」とヴァランタンがだしぬけに言った、「死んだ人を埋め直すんだよ」

「なんだって？」とほかの三人が聞き返した。

「死んだ人を埋めてさ」とヴァランタン、「それからしばらくたつとそこから掘り出して、また別な場所に埋めるんだ」

「なんて野蛮なんだろう」ジュリアが言う。

「歴史だっておんなじことさ」とヴァランタンが言う、「勝ちにしても負けにしても、過ぎたこととして終わりにすることは決してないんだ。しばらくたつとまた掘り返されて、どこか別の場所で腐っていく」<sup>(1)</sup>

どうやら彼らは、哲学的な用語での「賢者」を体現した人物らしいことがあきらかになってくる<sup>(2)</sup>。ここでいう「賢者」とは、アレクサンドル・コジューヴによるヘーゲルの『精神現象学』読解の講義にたびたびでてくる用語である。1932年から39年にかけて高等研究院でおこなわれたこの講義に出席したクノーは、講義録『ヘーゲル読解入門』<sup>(3)</sup>の編集までかつてでており、なみなみならぬ影響を受けたことがうかがえる。

コジューヴによると、「賢者 (le Sage)」とは、まったく自己意識をもっており、完全に満足している人、自らに関する質問すべてに、明解に十分に答えられる、そしてその答え全体に整合性があるという人のことで、その「答え全体」が「絶対知 (le Savoir absolu)」ということになる。そしてこの「賢者」の、「絶対知」によつてのみ、現実が示されるのだが、その現実とは普遍的で均質な状態のことである。それはつまり、たとえば階級闘争などの内部の矛盾がすべて解消された普遍的で均質な状態である。その普遍的で均質な状態ができあがるのは、「歴史の終焉」のあととされている。その「歴史の終焉」とは、コジューヴの解釈によると、自己の可能性をすべて実現し、理想を具体的に実践することによって真理に到達するという、人間の円環が閉じていく最後の瞬間をあらわしており、しかもそれは、歴史上の最後の英雄の行動と一致するはずである。その終焉のあとに起こることはすべて、全体的な体系のなかにすでに含まれていることではない、とのことである<sup>(4)</sup>。

『わが友ピエロ』のピエロ個人のなかではすでにあらゆる対立や欲望は解消されてしまっている、つまりピエロはひとりで自分だけの「歴史の終焉」を迎えてしまったあとなのである。ところがピエロの中で、知識への欲望が一時的に再びあらわれる。それはユニ・パークと対立するもう一つの世界の象徴である、ポルデーヴ王子の墓を見つけたときである。彼はその墓の来歴を執拗に知りたがる。二つの世界の対立を感じとったピエロは、一時的に「歴史の終焉」以前の知識への渴望へと逆戻りしているようである。しかしこの小説の中の世界も、「歴史の終焉」を迎えることになる。原因不明の火事でユニ・パークは消失し、二つの世界の対立は解消される、つまり普遍的で均質な状態が達成される。そしてピエロもまた、もとの態度にもどるわけである。いふならばピエロは、「歴史の終焉」以前から個人的には「賢者」であり、さらに世界的な規模の「歴史の終焉」に立ちあう「賢者」というわけである。

このような哲学的な示唆が隠されている『わが友ピエロ』に比べると、『人生の日曜日』は、哲学の痕跡を消し去ってはいない小説で、題名とエピグラフをヘーゲルから借りてきている<sup>(5)</sup>。

物語は、一見ヘーゲルとは関係ないように見えるが、さきほどのヴァランタンの発言も、彼が「賢者」として歴史が終わったあとの観点からものごとを見ていることを示している。これから起こることもすべて、完結してしまった歴史の反復にすぎないということを彼はわきまえているので、周囲の人たちが起こりえないと信じていた第二次大戦を予見することができたわけである。ひとりで一足先に「歴史の終焉」後を生きるヴァランタンは、ピエロと同じく無意識の「賢者」、つまりそれらしくも見えないし、特にそう望んでもいないのに「絶対知」を手に入れてしまった人だといえる。

ところで「賢者」の具現であるはずのピエロとヴァランタンが、まるで賢そうに見えないのはどうしてなのか。そのヒントがコジェーヴの講義録の中にあった。いわく「歴史の終焉」とは、厳密な意味での人間の死であるから、その終焉のあとで残る生物は、人間の形をしてはいるが精神を奪われた生体であり、彼らは動物的な生活を送るだけである<sup>(6)</sup>。衝撃的な内容ではあるが、歴史の円環が閉じてもはやなにも起こり得ないのなら、人間にはもう知るべき事はなにもなく、そこにはピエロやヴァランタンのような無意識の「賢者」しか現れないというのはうなずける話である。焼失したユニ・パークの跡地にできるのが動物園であるというのも、このことを踏まえると示唆的である。

このように、コジェーヴの思想にてらしてみると、クノーの作中人物たちはその見かけによらず、かぎりなくコジェーヴ流の「賢者」に近づいていくように見える。しかし彼らはほんとうに「賢者」の概念を体現しているのだろうか。実際には、コジェーヴを参考にして「謎解き」をすすめていく読み手のこじつけを拒むかのように、クノーの小説世界はコジェーヴ的枠組みから遠慮なくはみだしていく。枠組みにおさまりきらないのである。注目すべきはコジェーヴ自身によって、クノーのこれらの小説に登場する人物たちは、「賢者」の概念を体現しているように見えて、実は厳密には「賢者」ではない、と『クリティック』誌に寄せた書評で指摘されてしまっていることである<sup>(7)</sup>。

コジェーヴは、これらの小説の中では歴史は終わっていないのだから、「絶対知」を手に入れてほんものの「賢者」になることは不可能だとする。歴史が続くかぎり、一見「絶対知」のように見えるものも、実は自己満足的な模造品でしかない、というのである。しかし、ピエロやヴァランタンが「にせの賢者」だと指摘するコジェーヴの批判は、いささかの外れな印象を与える。というのも、クノーははじめから、「賢者」の概念を体現する人物を小説に登場させようという意図などもたなかったからである。ではクノーはなぜ、わざわざ「にせの賢者」など登場させたのか。クノーはその意図について具体的に語ったことはついになかったが、結果的にクノーが実際にやったこととは、コジェーヴの講義に影響を受けて忠実に賢者の概念を再現したかのように一瞬見せかけておきながら、むしろそれを相対化して懐疑を差し挟むための隙間をあけたことである。ヘーゲルの思想に全幅の信頼を寄せているコジェーヴは、クノーの解釈の「間違い」をわ

わざわざ書評で指摘してくれているが、クノーの試みは、まじめなコジェーヴをからかっているようにもとれるし、さらにコジェーヴがその翼にまんまとかかったようにも見える。

クノーがヘーゲル-コジェーヴの思想を相対化するために小説のなかに置き直しているという点については、ピエール・マシュレが「レーモン・クノーのヘーゲルの戯言」<sup>(9)</sup>という論考で興味深い議論を展開している。

マシュレは、コジェーヴが唱えたような「歴史の終焉」という理論は、まじめに受けとめる限りにおいて恐るべき理論であるが、コジェーヴが講義を行っていた1930年代当時にも、まじめに受けとめられていたとは考えにくいとしたうえで、コジェーヴの考え方はクノーの小説の滑稽さや親しみやすさによって現実的な次元に引き戻されてはじめて、そこで挑発的な意味を獲得すると述べている。

言葉のあらゆる意味において、コジェーヴの読み手であり書記であったクノーは、歴史哲学の、仮定的で、結局のところ寓意的な性格を暴いている。歴史哲学はこのような皮肉な移し換えという代償を払うことによってしか信憑性を維持できないのだ。そしてこの移し換えこそが、文字の下に隠れていて、いくらかの才覚をもって理解すべき真正の精髓を構成しており、つまりまた、それ自体の否定と反響しあう言説なのである<sup>(9)</sup>。

このようにマシュレの指摘も、クノーの小説はコジェーヴのヘーゲル講義の解説書であるところか、その信憑性の頼りなさをあばきだすような仕掛けであったという内容になっている。クノーは結局のところ、普通の人と同じように食事をしたり眠ったりする親しみやすい「賢者」ないしは「にせの賢者」の姿をえがくことで、学問の土壌においてはまことしやかに語られる歴史哲学の言説が、いざ日常的な次元に引き下ろされてみるとたちまち荒唐無稽な様相を呈してくることを示している。つねに懐疑をいだき、たえず相対化の視線でものごとを捉えるクノーは、絶対性、普遍性を前面に押し出したヘーゲルの思想に強くひきつけられたものの、やはり全面的に信じることはできなかったのである。

## 2. 不可思議な「見者」たち

クノーの小説のなかには、上に述べた見解をさらに深めさせるような作中人物たちがほかにも出てくる。それは、なんらかの不可思議な方法で未来を予見する人物たちである。ここではその種の人たちを便宜上「見者」とよぶが、これにあたるフランス語としては「占い師」の意味もある *le Voyant* が適切かと思われる<sup>(10)</sup>。

1936年というごく早い時期に書かれた『最後の日々』という小説には、磁気学と統計学を参考にしたうえで惑星の運行から算出することによって、未来のことがすべてわかるというカフェの

老給仕、アルフレッドが出てくる。この人物は、競馬で身を減ぼした父親の負けた分を取り戻すため、とてつもない万馬券の当たる日を計算して割り出し、カフェで働きながらその日をひたすら待っているのである。カフェの常連のブラバン老人にその能力を用いて助言をしたりもするが、控えめな態度を崩さず、自分については客にも多くを語らない。三人称の章がいくつか続いた後にアルフレッドの独白の章がはさまるといったリズムで成っているこの小説においては、アルフレッドが軸となる重要人物であることは確かである。だが彼が軸となっているのはあくまでほかの作中人物たちの観察者としてであり、その予見の能力は物語のなかではさほど大きな役割を持ってはいない。しかしもっと巨視的に、クノーの小説全般と、また、書き手であるクノーのもっていた認識と関連づけたとき、アルフレッドの能力は注目すべきものとして浮上してくるのである。しかも彼の能力が、不可思議なものに裏打ちされているかぎりにおいて、その意義を増すということになる。このことについては後述することにして、ひとまずもうひとりの「見者」の例をあげておく。

『人生の日曜日』のヴァランタン姉さん女房、ジュリアも「見者」のひとりである。ある日、近所のおかみさんが忘れていったマフラーを手にした途端、その持ち主が倒れて息絶える映像がジュリアの目の前をよぎったのだが、果たしてそのおかみさんは少し後になってまったくそのような死に方をしてしまった。そのことがきっかけとなってジュリアは夫にも秘密にしたまま、ヴェールで顔を隠し、サフィール夫人という偽名で占い女として開業する。サフィール夫人の占いは、ヴァランタンから聞き出す隣近所のうわさ話をもとにしているという多分に欺瞞的な方法をとっているものの、やはりジュリアの超自然的な千里眼の能力にたよっている部分も大きかった。

このような、理屈では説明不能な能力をもつ人物が登場することから、ひきだされるものはなにか。無意識ながら哲学的な概念を背景とした人物もいる一方で、クノーは超自然的なものへのまなざしも忘れなかった、ということだろうか。理詰め要素も、理屈抜きの要素も両方盛りこんだということだろうか。そう指摘することもできるが、このことに関してはそれだけにとどまらない。このふたつを並列することに大きな意義があるのである。

『人生の日曜日』の話のつづきを見てみよう。ジュリアの扮するサフィール夫人の占いは当たるとの評判が広まり、お客がひきもきらない盛況ぶりであった。ところがある日ジュリアは病気で倒れてしまい、かわりにヴァランタンがサフィール夫人の役をつとめる羽目になる。最初は自分の占いの能力に自信がもてなかったヴァランタンだが、なかなかどうして新しい仕事を上手に、しかも楽しんでこなせるようになり、ジュリアの時に負けないほどの人気を博するのである。

この挿話で注目すべきなのは、外から見れば「見者」ジュリアと「賢者」ヴァランタンが同じ役割を果たしているということである。なにも知らないお客にしてみれば、占いをしてくれるのが「見者」だろうと「賢者」だろうと同じなのである。要するに、占いと歴史哲学とが並列され

ていることがここでは重要になってくる。ヴァランタンの能力のほうは、れっきとした哲学的概念を背景としているのだとたとえ主張したところで、それもジュリアの能力と同じく不可思議であることに変わりはないのだ。こうして小説という土壌にこれらふたつを並べて置くことによって、クノーは占いと歴史哲学の両方の信憑性の危うさをきわだたせている、いいかえれば、歴史哲学にも占いと同じだけの信憑性しか与えていないのである。ジュリアとヴァランタンの能力はいずれも、外から（占ってもらいに来るお客から）見れば、同じように満足のいくものであるし、さらに外から（小説の読み手から）見れば、同じように不可思議であやふやなものに見える。ここにもクノーの相対化の力がはたらいているのである。

さきほどの、予見の能力をもつカフェの老給仕、アルフレッドに話を戻すと、この人物の場合、その自信に満ちた予見（そしてその予見は物語のなかでは決してあやまたない）の方法が結局具体的にはどんな計算によるものかはついに明かされないことこそが、ここで注目すべきことである。惑星の運行を基礎としているというアルフレッドの算出方法からはらいのけられない胡亂な印象は、クノーが若い頃一時期没頭したある研究を思い出させる。1924年から参加していたシュルレアリスムのグループを、ブルトンとの仲違いを機にクノーが脱退したのは1929年のことであったが、彼はその直後から、国立図書館で「文学狂人 (les fous littéraires)」の研究を始めた。「文学狂人」とはまずどのような人たちのことをいうのか、はっきりとなされているその定義を確認しておく必要がある。

まず、「文学狂人」からの除外の条件であるが、弟子をもった者、批評家や公衆からなんらかの価値をもつ者として認められた者すべて、およびすべての神秘主義者、幻視者、降霊術師、神知論者など、その苦心の果ての駄作が、なんらかのかたちで認められていたり、慎重な様相を呈しているために狂気とは結びつかないと考えられている者はすべて、文学狂人とは認められないという<sup>(11)</sup>。真に「文学狂人」と認められるためには、その印刷された労作が、彼の属する社会で発表されたあらゆる作品から離れており、なにものからも影響を受けず、なにものにも影響を及ぼさなかったという事実が必要である<sup>(12)</sup>。これらが「文学狂人」の定義であるが、実際にはどのような人々だったのか少しだけ例を引いておく。次の一節は、19世紀前半に3冊の本を出版したという、ルノー・ド・ベクール（またはレニョー・ド・ベクール）の著作の抜粋である。

天空は宇宙の殻を形成する、というのは世界はひとつの卵であり、その大気は卵白で地球は卵黄であるからである。大地ははじめ肉づきのよい動いている素材の球状の塊であって、そこからあらゆる植物と動物の種族がうまれた。それらの残骸、排泄物、死骸は、堆積物の最初の層を形成した。あらゆる天体はこの世から生じ、そこからおのれの本質を引き出す。第一の秩序を破壊した原罪に続いて、今彼らはおのれの本質を手に入れるために努力しなければならない<sup>(13)</sup>。

もうひとり、19世紀後半から執筆活動をしていた有名な「文学狂人」であり、クノーによって発掘されたというジャン＝ピエール・ブリッセに関する説明を以下に示しておく。

ブリッセは人間の祖先が蛙であったことを「証明」している。蛙が生まれたとき最初に発する言葉《コワ・コワ》は、人間の本源的な質問であるあの《なに？なに？（コワ？コワ？）》にはかならない。その蛙も、少なくとも昔は Je suis bien, l'eau j'ai (Je suis bien logé「住み心地がよい」)をもじって、l'eau「水」の中で幸せ、の意)と鳴いていた。しかし今や陸に上がった蛙はこう鳴く、Je suis bien, hors l'eau j'ai (水の外で幸せ、の意。ただし、水の外「オロージェ」は時計「オーロージュ」とかけてある)。かくして時間の概念を獲得してそれが数えられるようになった蛙は、いまや神の列に加わることになった<sup>(14)</sup>。

三年間も没頭したこの「文学狂人」の研究を、クノーはついに『不正確科学百科事典』と称してその成果をまとめるにいたったのであるが、いったいどのような種類の情熱がクノーのなかではたらいたのであろうか。この研究を「百科事典」にまでまとめあげたのは、クノーがそれまでも多方面において発揮してきた、何にせよ知識を、包括的、網羅的に獲得したいという百科全書的傾向のあらわれである。全体性をもとめるようにさえ見えるクノーの貪婪な知識欲は、幼い頃からの顕著な性質であった。ところがこの場合においては、凝り性が高じて、というだけではすまないようなのである。やはり「文学狂人」たちのもつなにかに、あらがいがたくひきつけられたのだ。それは一口に言って、全体性、絶対性への欲望である。

それぞれの「文学狂人」たちの常軌を逸した説の大部分が、むやみとスケールの大きなものであることは注目に値する。人類の起源や宇宙の根源などに言及したものばかりであり、ひとつの絶対的な真理を発見し、というよりもむしろつくりあげて、その真理を規準として世界を包括的に捉えていくという傾向が、クノーの取り上げた狂人たちに共通しているのである。この狂人たちの全体性、網羅的なものへの志向が、クノーを魅了してやまなかった。

ところが、全体性や絶対性への野望を捨てきれなかったクノーではあるが、同時に根強い懷疑をも持ち合わせていた。熱心に研究された「文学狂人」たちも、クノーの相対化の視線をまぬかれようはずもなかった。クノーによって研究対象とされた時点で「文学狂人」たちの研究は相対化され、その荒唐無稽さをあらわにする。さらに「文学狂人」たちの奇妙さを倍増している、語り口と内容の乖離、つまり、きわめて科学的な言説で語られる非科学的な内容という乖離も、客観視するクノーにとっては興味ぶかいものであったはずである。

その相対化の視線は、対象たる「文学狂人」たちからはねかえるようにして、クノー自身にも当然のことながら向かざるをえない。網羅的な傾向をもつ「文学狂人」たちをさらに網羅的にまとめあげ、ついには『不正確科学百科事典』を編んでしまった自分自身は、外側から見れば、ま

さに「文学狂人」的な資質を十二分にそなえていたと、クノーははっきりと認識していたようである。「人はどのようにして百科全書家になるのか」という文章<sup>(15)</sup>の中で、百科事典を編もうなんて狂人のすることだ、と述べていることからそれはうかがえるが、やはり『不正確科学百科事典』がどのようなかたちで出版されるにいったかという経緯が、よりはっきりとクノーの自身への客観視をものがたっている。

やっとのことで完成したこの事典の刊行を出版社に断られてしまったクノーは、小説の作中人物がそれを編纂したことにして、狂人百科事典をうまく入れ子状態にし、『リモン家の子どもたち』という小説の体裁をとらせてようやく出版にこぎつけたのである。この入れ子構造も、狂人の百科事典を編むという行為の奇矯さを外側から見るという相対化を許すものである。さらに、『リモン家の子どもたち』に関しては入れ子構造はこれだけにとどまらず幾重にも重なっており、たえず外側へ外側へと相対化が徹底的におこなわれているのである。

さて、このように絶対性や包括的な知識への欲望と同時に、執拗な懐疑と冷静な客観視をもちあわせていたクノーが、認知度からいえば「文学狂人」たちとはまさに比べものにならないほど大きかったヘーゲル哲学に目を向けたとき、同じ相対化がおこなわれたいとは誰が断言できるだろうか。「文学狂人」の研究と、コジューヴのヘーゲル読解の講義への熱心な参加が、30年代のちょうど同時期であったことは予想以上に重要なのではないだろうか<sup>(16)</sup>。言うまでもなくヘーゲルはクノーの定める「文学狂人」の条件を満たしてはおらず、即「失格」であるはずだが、『不正確科学百科事典』を編むクノーの姿と、コジューヴの『精神現象学』講義録を編纂するクノーの姿が重なってみえる。

### 3. 「不正確な科学」としての歴史

『わが友ピエロ』が、コジューヴのヘーゲル講義を下敷きとしている小説のひとつであることはすでに述べたが、これと同時期に、もうひとつコジューヴの講義が契機となって書かれたものがある。それは現在『模範的歴史』という表題で出版されている奇妙な試論であるが、これははたして数学と、コジューヴ講義によるヘーゲル史観とを結びつけようという意図のもとに着手されたものだと、マシュレは前出の論考のなかで指摘している<sup>(17)</sup>。

周知のように数学好きのクノーはこの試論によって、ヘーゲル-コジューヴの史観に、数学的な裏付けを与えてみようとしたようである。19世紀から20世紀前半にかけて活躍したイタリアの数学者、ヴィット・ヴォルテラの『生存競争の数学理論に関する講義』という文献を参考にしたというこの『模範的歴史』は、じっさいいかにも数学らしい体裁で、不定整数を使った数式なども織りまぜたごく短い96の断章から成っているのである。

そして、執筆時期を同じくしていた小説『わが友ピエロ』とこの試論とのあいだには興味深い関係が成立する。つまり、コジューヴ講義を参考として発展したクノーの歴史認識の、『模範的



『歴史』はいわば理論編であり、『わが友ピエロ』はいわば実践編ということができる。一見したところではこれら二冊の本のあいだにはっきりした関係をうちたてるのは困難だが、実はヘーゲルの史観という同じ主題を扱っており、前者は数学を援用しながら理論的にまとめたものであり、後者はその主題のもつアカデミックなおいをできうるかぎり消し去りつつ、具体的な事象に寄り添いながらひそかに言及したものなのである。

ではクノーは『模範的歴史』のなかで具体的にはどのような理論をうちたてているのだろうか。一例をあげよう。

$N(t)$  を時間  $t$  における集団の構成員の数とし、 $Q(N)$  をこの集団によって1年に消費される食物の量とし、 $Q$  をこの集団が占めている土地から、働くことなく得られる食物の絶対量とする。この集団には隣人もなく、おそれるべきほかの種類の動物もいないと考える。 $Q(N) = Q$  であるとき、危機となる。 $N(t)$  は増大していくと考えられるので、 $Q(N)$  も増大していく。 $T$  を、危機の時間とし、 $T'$  を、この第一の時代が続くあいだの純粋に仮説的な時間とすると、 $T' > T$  のとき、黄金時代がおとずれる<sup>(18)</sup>。

「歴史を科学にすること、それがこの本の目的である」<sup>(19)</sup>というふれこみで書かれたこの本のさまざまな数学モデルはしかし、単純な先史時代においてしか機能せず、より複雑な要素を加味しはじめればたちまち破綻することは目に見えているのだ。

ここにみずからがその研究に没頭した「文学狂人」たちに酷似したクノーの姿があらわれる。「文学狂人」たちを網羅する『不正確科学百科事典』を編纂したときにすでに、クノーのなかには「文学狂人」のいくばくかの資質が認められたのだったが、この本に関してはついにクノーも「本物」になってしまったかのような印象すら与えられる。行間からあらわれてくるのは、「不正確な科学」としての歴史の姿であるからだ。

「黄金時代」のほかにも未来のできごとを読む「予見」や、惑星の運行と「周期性」についても考察しているこの本は、これに先立つ時期に、つまり『不正確科学百科事典』を仕上げたあとにもあたる時期に書かれた『最後の日々』のなかの人物を思い起こさせる。それは前節で「見者」として紹介したアルフレッドである。アルフレッドの予見の能力とその不可思議な算出方法は、もっと漠然としたかたちをとってはいるが、『模範的歴史』の内容に近い。本末転倒な言い方をあえてするなら、クノーはこの風変わりな試論を書くことでアルフレッドを「地でいく」ように見えるのだ。アルフレッドは控えめながら、「不正確な科学」としての歴史をきわだたせる人物である。それぞれの性質こそ違え、未来を見通せる人物たちは、「見者」にしろ「賢者」にしろ、同じはたらきをしているように見えはしまいか。

ところでクノーは、「歴史の科学化」にまじめに取り組んだあげく、はからずも「不正確な科

学」にたどりついてしまったのではない。常に慎重な態度を崩さないクノーは、この本の冒頭で早くも懐疑的な見解をうちだしている。

第二章では、見出しの部分で、「しかし歴史はひとつの科学だろうか？ 否。」と自問自答してクノーは続ける。

歴史は、出来事を予見したり、それに働きかけたり、出来事を変えたりすることを許さない。歴史は科学ではない。歴史は、質的な、錬金術的な、占星術的な段階にとどまる。歴史はかんたんなひとつの物語（レシ）であり、それにいろいろな質的な判断や、盲目的な原因探究がともなったものである。歴史はひとつの混乱した科学である。科学ということばの意味を不当に拡大した場合にしか、歴史が科学であるとはいえない<sup>(20)</sup>。

だがこう言い切った直後、第三章の見出しはこうである。「歴史はひとつの科学になりうるだろうか？ なる。」そして第三章の内容はこうである。「それがこの本の目的である。」

『模範的歴史』には、このような書き手の態度の揺れを解説してくれるような「誕生秘話」がある。クノー自身の解説によれば、執筆当時のこの本の題名は『歴史の絶対的な科学についての研究草案』というものであった。それはデカルトの同時代人である幾何学者ジェラルム・デザルグの『円錐と平面との交わりについての研究草案』という表題にちなんでつけたものだというのが、*「研究草案 (Brouillon projet)」*という完成にはまだ遠いような表現と、*「歴史の絶対的な科学 (une science absolue de l'histoire)」*とりわけ「絶対的な」という表現との対照に、はやくもクノーの懐疑の態度を読みとるべきではないだろうか。さらに *brouillon* は形容詞としては「混乱した」という意味をもち、不確かさを強調しているようですらある。また、「歴史の絶対的な科学」という断定的な表現は「文学狂人」たちを、そして彼らにそそがれたクノーの相対化のまなざしを思い起こさせ、逆にその絶対性を怪しげなものにみせている。

この試論が未完に終わっているのも意図的なことであり、排他的な理論や閉じた体系をうちたてることは、クノーにとって最初から問題外であったのだというマシュレの見解も当を得ていると思われる<sup>(21)</sup>。前述したようにクノーが参考にしたというウィット・ヴォルテラの文献にしても「生存競争」と「数学理論」という言葉の組み合わせからは、ちぐはぐな印象がぬぐいされず、「文学狂人」的な趣もたよう。

こうした細部に、常に対象と距離をとるクノーの態度があらわれている。こうした態度をたもちドグマに陥ることを拒否するクノーの姿勢は、書く行為に関して終生変わることがなかった。ところで、今までたどってきた道すじからは、絶対性への欲望をかかえながらもその不可能性を意識しており、際限のない客観化を繰り返ひろげる、そしてそれを書く行為の原動力ともしているクノーが浮かびあがってくるのみである。しかし、『模範的歴史』にまつわるもうひとつの逸話

は、クノーを駆りたて、また律していたもうひとつの原動力へとつながる通路となっている。

ジャン・クヴァルの回想によると、『模範的歴史』は、「この本は小説ではない」という宣伝用の帯を付けられて出版されたというのがその逸話であるが、ここから見えてくることはなにか。帯の文句によってこの本が、逆にその文学性を露呈するということではあるまいか。時はすでに1966年、クノーのかずかずの愉快的な「小説」に出会ってきている読者たちに、これはああいった「小説」とは違うたぐいのものです、と店頭で注進するのがこの帯のおもてむきの役目なのだが、別の作用もおよぼすということに注目しなければならない。「小説ではない」という注意を促すことによって、この歴史理論の書が「小説」として読まれうる可能性があったことに気づかせるという作用である。1942年の執筆時につけられたタイトルが、1966年の出版時にあらためられたことを告げるクノー自身による序文も、その作用を強めている。先ほども書いたように『歴史の絶対的な科学についての研究創案 Brouillon projet d'une atteinte à une science absolue de l'histoire』だった表題は、『模範的歴史 Une histoire modèle』に変わった。全体的な趣もずいぶん変わったが、ここでの一番の違いはやはり「歴史 histoire」という語の冠詞が、定冠詞から不定冠詞に変わったことであろう。新しい表題は、『模範的物語』とも考えられうるようになったのである。風変わりではあるが歴史についての科学的な理論を扱った書が、単なるひとつの物語、小説、文学として読まれうる可能性を示唆する改題は意義深いものであった。ここには、クノーが追究をやめなかった「小説とはなんなのか？」という問いがあらわれており、それはクノーの小説を書く活動の根底をなす重要な問いだけでも、これまでも言及してきた客観視の姿勢のひとつの変奏にすぎない。ここで重視しなければならないのはむしろ、奇妙な理論書の体裁をとった一冊の本が文学たりうる可能性であろう。

クノーにとっての文学性、ひいては芸術性が、遊戯性と結びついていたことを思い起こしてみよう。「芸術とは何か」という1938年に発表した論文<sup>(22)</sup>のなかで、いたずらな靈感に身を任せての創作行為を糾弾し、厳密な規則に拠っていた古典主義の作家たちを称揚したクノーは、明確な意図と意識をもって創作活動にあたるべきだとし、みずからになんらかの規則を課すこともやぶさかでなかった。なんらかの規則、それはきまじめのように見えて、ある種のゲームの規則のような遊戯的な側面をもっていたことは、今さら指摘するまでもないだろう。『模範的歴史』では、歴史に関する数学的モデルというものが、ゲームの規則として採用されたのである。

くだんの「文学狂人」の選考基準もゲームのルールの様な様相を呈していて、クノーはそれらの条件をクリアした狂人たちの奇想天外な諸学説を楽しみながら、同時に、彼らの著作のうちに文学的な文体をたしかにみとめていたに相違ない。さもなくば、「不正確」とはいえ、まがりなりにも「科学」学説をとなえる狂人たちがわざわざ「《文学》狂人」と名づけられたはずはなかったろう。

本稿の前半で検討した「賢者」などのヘーゲル-コジェーヴ的概念も、ゲームの規則として

『わが友ピエロ』や『人生の日曜日』に採用されたと考えることもじゅうぶん可能である。ただ、これらの小説には、いくつものゲームの規則がさまざまなレベルにおいて課されているから、哲学的概念も唯一の支配的な規則というわけではない。小説においてひとつの主要な規則体系を定めてしまわずに、つねに重層的にさまざまな規則を重ねていったこと、およびそれらの規則性を読み手にあからさまには示さず、細部はむしろあいまいにしたことも、クノーはひとつの規則として従っていたように思われる。

世界を、歴史を、現実をまるごと捉えたいと熱望しながら、それは不可能だという苦い認識をつねにかかえている、そういった息苦しさのなかにクノーが開けた通風口、それが規則の設定をはじめとする遊戯性であり、通風口は芸術性へと通じている。懐疑と限界とのせめぎあいの激みを吹き払ってくれる風たる芸術性こそが、あるいはクノーの本質であるかもしれない。

相対化を繰り返していく冷静で皮肉な観察者という姿勢を越えたところまで行っていたそのクノーが歴史を扱ったものに、本稿でふれたもの以外にもうひとつ、晩年の『青い花』という小説がある。一読したところ、さまざまな規則にのっとって書かれたとおぼしき、指摘できることがらが大量にあるとおぼしきこの小説を、今後検討していく際に、クノーは歴史をどう捉えたか、というよりむしろ、クノーは歴史とどう遊んだか、という問いを発するほうが妥当のようであった。

## 注

- (1) *Le dimanche de la vie*, Gallimard, 1952, (coll. folio), p. 189.
- (2) Pierre Macherey, *Divagations hégéliennes de Raymond Queneau* dans *À quoi pense la littérature ?*, *Exercices de philosophie littéraire*, Presses Universitaires de France, 1990.
- (3) Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, Leçons sur la Phénoménologie de l'Esprit professées de 1933 à 1939 à l'École des Hautes Études réunies et publiées par Raymond Queneau, Gallimard, 1947.
- (4) *ibid.*, pp. 271-291.
- (5) 「人生の日曜日こそが、すべてのものを平等にし、邪悪なものをすべて遠ざける。これほど上機嫌を授けられた人間が、本質的に邪悪であったり卑しかったりするはずはない。」ヘーゲルの『美学』の中の一節である。
- (6) Alexandre Kojève, *op. cit.*, note, p. 388.
- (7) Alexandre Kojève, *Les romans de la Sagesse* in *Critique*, n° 60, mai 1952, p. 393.
- (8) Pierre Macherey, *op. cit.*, pp. 53-73.
- (9) *ibid.*, pp. 60-61.
- (10) ここではランボーの用いた用語「見者 (le Voyant)」とは関係がないものとする。
- (11) *Les Enfants du Limon*, Gallimard, 1938, p. 57.
- (12) *ibid.*, p. 130.
- (13) *ibid.*, p. 133.
- (14) 『万国奇人博覧館』、G・ブクテル、J-C・カリエール、守能信次訳、筑摩書房、1996年、pp. 319-320.

- (15) 《Comment on devient encyclopédiste》, dans *Bords*, Hermann, 1966, p. 120.
- (16) イタロ・カルヴィーノも「レーモン・クノーの哲学」という文章のなかで同様の見解をうちだしている。  
「なぜ古典を読むのか」、イタロ・カルヴィーノ、須賀敦子訳、みすず書房、1997年、p. 309。
- (17) Pierre Macherey, op. cit., p. 71.
- (18) *Une histoire modèle*, Gallimard, 1966, chapitre XXI, p. 30.
- (19) *ibid.*, chapitre III, p. 11.
- (20) *ibid.*, chapitre II, p. 10.
- (21) Pierre Macherey, op. cit., p. 68.
- (22) 《Qu'est-ce que l'art ?》, dans *Voyages en Grèce*, Gallimard, 1973, p. 94.